子ども・若者支援と居場所
～「非」専門的な場の価値～

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
松田　考

本日の話題提供

若者世代の居場所は本当に必要なのか

ひとくくりに居場所といっても多様

居場所に公的なお金を拠出する意味

居場所にいる大人の役割

私の実践ＰＲよりも、それを題材にした話題提供として

札幌の若者支援の始まり

出典
明日への架け橋
－札幌市中央勤労青少年ホームの２０年－

昭和５９年７月
札幌市発行

居場所と支援の混じるところ

とりあえずロビーにやってくる中高生

中途半端に悪さをする構ってちゃん

虐待一歩手前のシングルマザー

障がいを認めたくない困ったちゃん

登校できたりできなかったりの瀬戸際

ギリギリで踏ん張るヤングケアラー

一線を越えるまで相談しない

一線を越えたら行政を避ける

ずっと悩んできたこと

地域とともに“健全な青少年”の余暇(自主)活動を育む

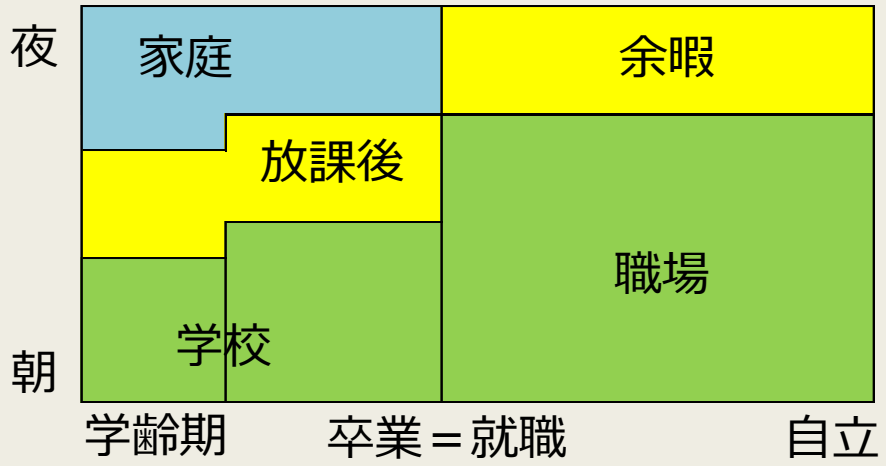
↕

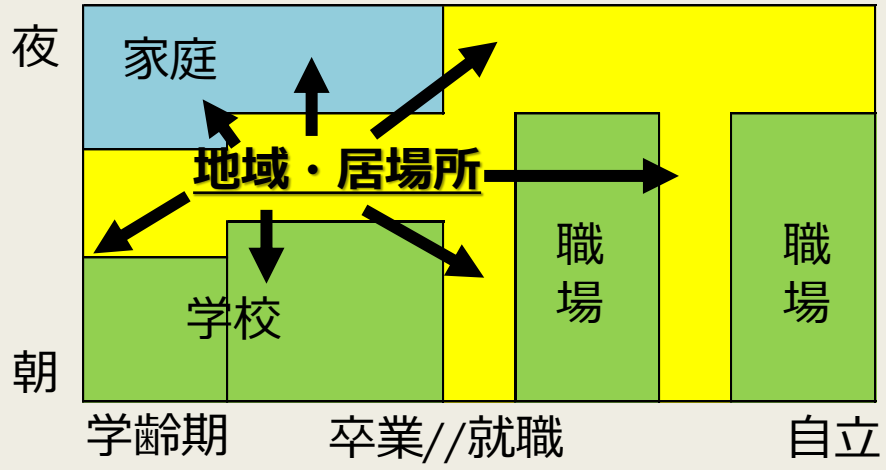
専門機関とともに”困難を抱えた子ども・若者”を支援

「この２つは地続きなのか、別モノなのか」

子ども・若者の権利を「足して10」で保障

たどり着いた結論





子どもたちが真に豊かに育つには
放課後や余暇は、家庭や学校と同じくらい大切

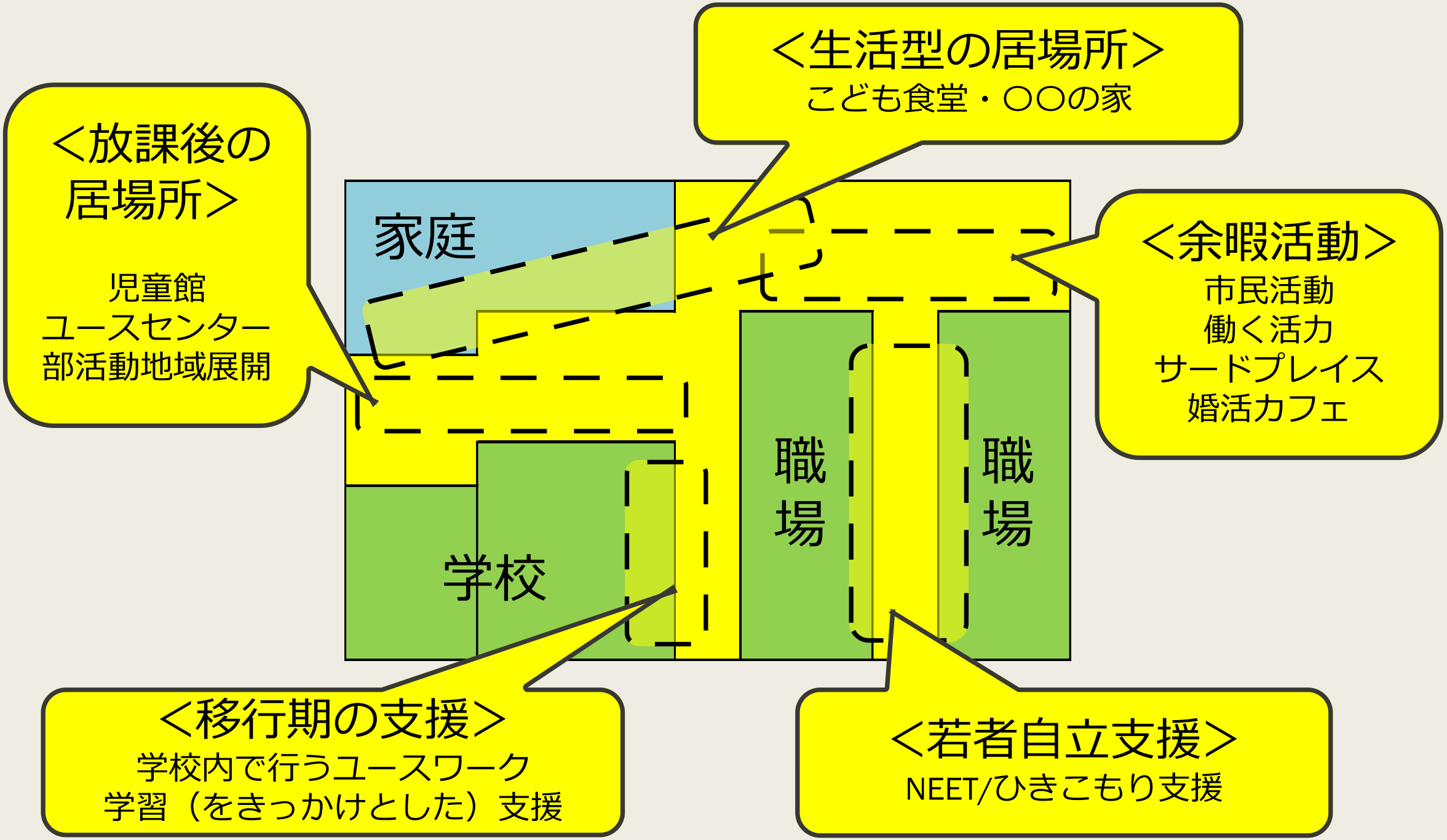
しかし！

日本では、放課後や余暇は・・・
学校に行ってる人だけの「ごほうび」
家にお金がある人だけの「ぜいたく」
ちゃんと働いた人だけの「みかえり」
→勝ち組だけに配られる「デザート」

だからこそ！

家庭・学校・職場に左右されない領域で
全ての子ども・若者を「社会で」育てる

ひとくちに居場所といっても



居場所の成果を巡る議論

本人は楽しく
過ごしている
だけで自然と

- 感性が豊かになる
- 素直に周りを頼れる
- 表現力が磨かれる
- 期待に応える喜び
- 体力がつく
- 働くイメージがわく
- 思いやりが身に着く
- 将来のためにがんばる
- 興味関心の幅が広がる
- 民主主義社会の礎

水面下で

目的(≒対象)を設定するべきか
大人(≒支援者)は意図をもって関わるべきか
これらの成果を評価・公表すべきか

居場所づくりを巡って

若い世代に“強者”が関わるためのお作法とは？

一見無駄に見える
居場所や遊びにも
社会的価値がある

行政主導ではなく
子どもや若者の声を
まんなかにおいて

大人や行政の論理で
居場所や遊びに
成果を持ち込まないで

本来は行政が
やるべきことを
美談で消費される

公的なお金を
投入する以上は
成果説明は不可避

公的なお金に
頼らない
私設公共でいこう

居場所にいる大人の役割

場	大人	関わり	ルールや正解
1st 家	親	育てる	大人側の経験と価値観
2nd 学校・職場	先生 上司	教える	大人側の知識と伝統
3rd 居場所	ユースワーカー？	遊ぶ？繋ぐ？見守る？支援？	子ども若者の気持ちと関係性

しかし、何のプロなのか分からないから軽視される

正解を手放して、子ども・若者と関わり
それでもなお「意味ある他者」でいる
→権利の概念と相性が良い

居場所の日常

【ユースワーカー】
若者の「やってみたい」や
居場所で漏らしたSOSを
キャッチし、つなぐ日常家

【こどもコーディネーター】
居場所から相談機関まで
縦横無尽に動く、伴走者

勉強分からないところある？

一緒にたこ焼きパーティーしない？

ボランティアやってみない？

おうちや学校で困ってることある？

相談員さんのところに一緒にいく？

ケアと地域を繋げる工夫

「専門家の相談室」では
10日間で10人の
緊急事態を救える

でも・・・
その10倍くらいの
「相談したくない人」とは
出会えずにいる

専門家と日常家が繋がると
見守り」ができるようになる

「街の居場所」では
10日間で100人の子と
仲良くなれる

でも・・・
そのうち10人くらいの
「SOSのサイン」を
見逃している

居場所にできること

向き合うべきは、孤独・孤立

わかる！
がんばったよね！

日常家の知識・場数・共感力
子どもの頃から慣れ親しんだ居場所
思い出づくり自体が最強の支援